



## 最近の若いものは

山中伸介\*

近頃、「最近の若い者は覇気がない」とか「やる気がない」とかということをしばしば耳にする。私は、常々その言葉に大いに不満を感じ、反発をしているのであるが、私自身の年齢、立場が非常に中途半端なところに存在しており、時として「最近の若いもの」の立場であり、また「うんぬん」という批判する側の立場にあったりするのである。

では若者というのは一体何歳位から何歳位までをいわれるのであろうか。ものの本によれば、それはおよそ18歳～35歳をさすもの様である。だから、今年29歳になろうとしている私は、35歳以上の人からみれば、若い者であろうし、20歳前後の若さを謳歌している人達から見れば、もうすでに中年の範ちゅうに入っているかと思われる。だから最近の若い者の一人として「若者」を語るには年をとりすぎ、私自身「最近の若いものは……」と口にしようとして少なからず戸惑いを覚える昨今なのである。しかし、年をとりすぎた若者ではあるが、「最近の若い者」のために少し抗弁を試みたいと思うのである。

「覇気がない」「やる気がない」「根性がない」とまるで「ないないづくし」の様にいわれるが「覇気」とは何であろうか、「やる気」とは何であろうか、角川書店発行の国語辞典によると、「覇気」とは、他を制して支配者になるうとする気持のことであり、「やる気」とは、人間の三大欲望、すなわち、物欲、食欲、性欲を獲得すべく、夢中になって突進して行くエネルギーのことだそうである。最近の若者は、「覇気」や「やる気」の原動力である三大欲望を持たないのであろうか、将来に対してどんな事を求めているのかを知るために色々調べる間

に、ある外国雑誌の中に興味あるアンケート調査を見つけたのでここに引用し、日本の若者との比較検討の資料としたい。

ヨーロッパの若者達のむこう十年間にのぞむ世界、生き方を問うアンケートに対する結果は次の通りである。

☆住む場所	☆郊外のよい理由
田舎 35%	楽しい 9%
街 12%	陽当りがよい 15%
郊外 51%	静か 41%
☆仕事について	
同じ仕事 51%	
変りたい 42%	
やめたい 6%	
☆昇進について	
昇進し、成功したい 62%	
このまま静かに暮したい 26%	
☆週労働時間	
35時間 36%	
39～40時間 32%	
☆余暇時間	
家庭サービスする 77%	
スポーツする 72%	
他の仕事を重ねてもつ 53%	
観劇・シネマ 74%	
旅行 90%	
読書 61%	
近隣活動 54%	
☆消費生活	
節約する 34%	
消費する 57%	

上記の如く旅をしたい、成功したいと望むと同時に、あまり働かないでより多く消費したい、つまり、リスクと同時に確実性を求めている。一方ではリスクへの挑戦であり、進歩的生き方にエネルギーを費し、一方では安全性の固

\*山中伸介 (Shinsuke YAMANAKA), 大阪大学, 工学部原子力工学科, 助手, 工学修士, 原子力工学

執のあまり保守的で無気力になっている。この様なところは、洋の東西を問わず、最近の若者のもつ特性といえそうだ。この調査で第二番にいえることは、ヨーロッパの若者は、決して職業をかえることを好んではないけれども、今の職業は自分自身に適当でなく成功しないと判断すれば、一つの職業にとどまらず、転職するということである。やる気を出して、成功のために腕まくりして、頑張ろうとしていることをうかがい知ることができる。若者達には色々と共通点が多いのであるけれど、大きく異なる点がある。彼らは騎馬民族であり、国境を他国と接し、絶えず危機におびやかされつづけた国民であり、ヨーロッパの若者達とその父親達は社会を自由独立してゆける状況にするために、保護された社会の夢を放りすてようとし、自由社会に生きることが労働意欲を失わさない主因でさえある。オリジナルであることを目指し、職業的な野心を身にまといながら余暇を追求する。現実の厳しさの前に極めて保守的に家庭の安全を求めながら競争と危険の自由社会に身を置くことをためらわないのである。そして未来の暇な時間をどう費やすのだろうか。若い者の77%がマイホームを楽しむ欲望を育てながら美しい旅を望んでいる。その美しい旅の中で家庭の再発見をしようとしている。

では、日本の若者のあり様はどうであろうか。日本人は、イダヤ・ペンダサンというところのキャンペーン型農耕民族であり常に画一的集団性をもつ国民であり、いつもフワッと同じパターンで行動を共にし、皆同じであることに安定感を持つものの様である。みんながそろって幼稚園に通い、塾に通う。一流企業に入る資格をとるため一流大学へ入る努力をする。そして、能率よく学び、能率よく楽しむ。スキー、旅行に集団で殺倒するのである。常に他人を意識し、集団から離れることなく集団的思考、行動をとる。“赤信号、みんなでわたればこわくない”という言葉さえ生まれる土壌があるのである。この特性は、最近の若者にのみ、みられるものだろうか。口を開けば、若者を憂える老人達の若い頃はどうかだっただろうか。忠君愛国一色に塗りつぶされ、国家のためにひたすら滅

私奉公したゴリゴリの精神主義集団であった。しかし、第二次大戦時に物量の前にあえなく敗れてからは経済至上、物質至上主義に傾倒し、経済立国を目指して滅私奉公し、家庭も個人も集団の中に埋没してしまったのは中年の人々である。そして、心の部分が次第に失われ、「もの」への信仰に固まっていった。この様な経過を経て物の氾濫の中に生まれ育った最近の若者が、常にかっこよく生き皆と同じ事をすることに終始しても決して不思議ではないと思われる。

しかし、ここで注目したいのは、日本の若者の場合も、没我的努力をしてエリートコースを歩いた人達がとりたててよいこともないことを目の前にし、人間本来格差があっても当然であることを知り、自分の能力を生かせる分野へ転職する若者が増えはじめたことだ。また、利潤のみを追求する企業への就職をさげ、集団から離れて独立独歩、ユニークな生き方を求める若者も目にしはじめたのである。すべての若者が他人ばかりを物指しにして金や時間を浪費しても疲れやあせりばかりが残ることに早く目覚るべきである。

終りに、非常におこがましいことであるが、現在の日本を築いた偉大な大人達に現在の日本の社会が、すっかり行届いた管理社会になってしまい安全第一が尊ばれ、「何か」をやることや「何かをやりとげる」ことを目指すより、苦痛や欠乏からの自由を確保することに関心を注いでいる若者の現状と、集団からの離脱を好まない国民性が相まって「覇気」を失わせる主因となっていることを知っていただきたいと思う。また、安定した社会の中で、冒険や探索の場が次第に失われつつあり、「やる気」をそいでいることも知ってもらいたいのである。

そして、私はいささか古びた若者として、後に続く若者達と共に汗し、勉強し、常に知的欲求の対象に取り組んで、若者達が謙虚に、先人のしいたルールに乗りながら自分の能力を発揮する生甲斐を見つけ「やる気」を出すまで、「やる気のないやつだ」と決してあきらめはしないつもりだ。